

第五章 浮舟の物語 浮舟、三条の隠れ家に身を寄せる

[第一段 乳母の急報に浮舟の母、動転す]

乳母、車*請ひて(乳母は迎えの車を呼び寄せて)、常陸殿へ*往ぬ(常陸守邸へ行きました)。 *「こふ」は<願い求める>だが、「たてまつる」などの謙譲表現がないので、相手の厚意を期待するのではなく、自分の権限として手配を付けるという言い方なのだろう。少なくとも、御方に依頼したのではなく、今ならタクシーを呼んだような言い方だが、当時は車方の独立業務が成立しない社会制度だったかと思う。で、即ち、乳母は姫の世話役として火急の際には主人家から車を回させる権限を与えられていたのであり、恐らくは昨夜の内に、子細は事の秘匿上から伏せながらも、緊急の相談事がある旨を守夫人に書付連絡し、車を寄越すように申し立てた、という事情なのだろう。 *「いぬ」は<行った。去った。>という客観表現で、主人家に「参ず」でも、主人家から「退く(しぞく)・まかづ」でもない立場属性が示されない言い方だが、無属性が示す立場もある。それが正に客人としての姫の立場で、是は乳母自身でも、御方でも、守夫人でもなく、姫の目線で語られている、乳母の居ない心細さが漂う言い方、なのだろう。

北の方にかうかうと言へば(乳母が奥方にこれこれと三の宮が姫に近付きなされた子細を知らせると)、胸つぶれ騒ぎて(奥方は胸つぶれ動揺して)、「人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ(外聞も悪く)。正身もいかが思すべき(姫自身もどうお思いになることか)。*かかる筋のもの憎みは(こういう事での嫉妬は)、貴人もなきものなり(御方のような貴婦人も凡人も区別無く持つものだ)」と、おのが心ならひに(と自分の経験から)、あわたたしく思ひなりて(じっとしていられずに)、夕つ方参りぬ(夕方に二条院に参上しました)。 *「かかるすぢのものにくみ」は注に<男女関係のことでの嫉妬。>とある。「嫉妬」ということは、御方が姫を邪魔に思う、ということだろうか。「貴人(あてびと)」は<御方>ということになるから、守夫人は御方の姫への意地悪を危惧した、のだろうか。「おのが心ならひに」とあるので、自分が亭主の浮気相手に覚える排除欲求や、従兄妹に当たる八宮正妻から受けた冷遇の記憶などを、守夫人は実感していたのかも知れない。

宮おはしまさねば心やすくて(守夫人は匂宮がいらっしやらないので安心して)、

「*あやしく心幼げなる人を参らせおきて(あまりに未熟な娘を此方へ伺わせて)、うしろやすくは頼みきこえさせながら(あなた様の御世話を安心してお頼み申しながら)、*馳のはべらむやうなる心地のしはべれば(常陸守家ではイタチが居るかのよう、今回の姫の外出を妹夫婦に対する当て付けかと疑いの目を向けられている気分で)、*よからぬものどもに(娘の高貴な血筋を理解できない、低俗な田舎者たちに)、憎み恨みられはべる(差配申した私は、非難され責められて居ります)」 *「あやし」は何に掛かるのか。「心幼し(未熟だ)」に掛かるなら<年に似ず晩生だ>という言い方だろうし、「参らす(お邪魔させる)」に掛かるなら<特別な形で御世話になる>ということだろう。どちらも成立しそうで分かり難いが、下文の御方の返事が「いとさ言ふばかりの幼さにはあらざるを」とあるので、「心幼し」に掛かる言い方だったらしい。 *「馳(いたち)」は動物のイタチで、大辞泉に「いたちのまかげ(馳の目陰)」という語が<「イタチが人を見るときに前足を目の上にかざす」という俗信から>疑わしげに人を見るようす。>という言い方としてあり、「いたちのはべらむ」は<疑心暗鬼でいる>という意味で、常陸守家を例えているらしい。注には<『細流抄』は「いたちは狐の性の類也。狐は狐疑いとて物をよく疑ふ心のある物也。その如くにいたちも疑ひの心のあるもの也。うしろやすくは思へど疑はしき心のあると也。いたちのまかげなどいふも疑心のある故也」と指摘。『完

訳』は「心配なあまり落ち着かぬことか。東国ふうの田舎じみた比喻であろう」と注す。>とある。 *「よからぬもの」は<卑しい者>で、姫の高貴な血筋の価値が分からない田舎者、みたいな言い方なのだろう。勿論、是は今の自身の立場である常陸守家を卑下してはいるのだろうが、御方は同じ王家筋の高貴な血筋ある義妹として娘を思ってくれていますよね、という念押し確認でもありそうだ。

と聞こゆ(と御方に申し上げます)。

「いと*さ言ふばかりの幼さにはあらざめるを(あの人はそんな風に言うほど幼くはないようですが)。うしろめたげにけしきばみたる*御まかげこそ(悪意があるように敵視するお家の方々の御疑いが)、わづらはしけれ(困りますね)」 *「さ言ふばかりの幼さにはあらざめるを」に敬語遣いはない。御方から見て守夫人は女房身分で仕えていた者だし、今も地方官の家柄で、娘を預かっている宮家の御方の立場からすれば、敬語遣いしないのが普通の関係性で特に気にすることはない、のだろうか。しかし、守夫人は御方の母君の従兄妹に当たる縁者であり、異母妹の母である。それだけに親しいとも言えるだろうが、守夫人が言った「あやしく心幼げ」という言い方に<決して宮を誘うことはない>という弁明はありそうなので、それに対する御方の応えとしては<まんざらそうでもないでしょう>という皮肉になっていて、だからこそ、嫌味にならないように軽口めいた言い方をした、ような感じもする。 *「おおんまかげ」の「御」は守夫人への尊称ではなく、常陸守家に対する尊称だろう。「まかげ」は「いたちのまかげ」のことで「いたち」は常陸守たちだ。夫人への敬意を示すなら「けしきばむ」に「たまふ」を付けて話すはずだ。

とて笑ひたまへるが(と言って御方が笑っていらっしゃるのが)、*心恥づかしげなる御まみを見るも(気後れするほど品のある御眼元であるのを見るにつけても)、*心の鬼に恥づかしくぞおぼゆる(守夫人は自身の体験から昨夜の件を娘の不始末と恥じ入ります)。「いかに思すらむ(どうお思いなのだろう)」と思へば(と守夫人は御方の心中を察すると)、えもうち出で聞こえず(とても昨夜の事件を持ち出し申せません)。 *「心恥づかしげ」は<此方が緊張するほど立派な相手の様>をいう言い方のようなのだが、是は、決して相手に非難されたり責め立てられて緊張するのではなく、その姿勢に自信を持った力強さがあって、些事に捉われないような大きさを感じさせる相手に敬服する気持、のことかと思う。だから、上文の御方の返辞も、宮に隙を見せたと姫を難じるものではなく、姫の様子や乳母や右近の話などからも宮の未遂と判断しているのか、事件自体を重大視していないかのようにさえある、のだろう。しかし、「見るも」の「も」は逆接助詞で、御方は平静だというのに、守夫人は自身の実体験から覚えた御方の不興を買う危惧から、下に「心の鬼に恥づかしくぞおぼゆる」と娘の不始末を案じている、という文意になっているようだ。それにしても、私の感覚とは御方も守夫人もずいぶん違う。私が思うには、御方には常陸女を預かっている管理者責任があるのだから、むしろ夫の不始末を夫人と姫に詫びて当然だ。が、貴人の、それも親王である匂宮の存在は絶対的であるらしく、まあ御方も御部屋様に過ぎないし、夫が家でする所業に不始末などは無い、という世界観に此処の人びとは生きていられるらしい。主人たる者そうありたい、または、そうあるべき、なのかもしれないが、私には何とも現実味がない話だ。尤も、誰が悪いと言ってみたところで、常陸女と匂宮の仲を誰も望まない以上は、娘御をこの二条院に置いて措けない事には変わりはない。その意味では、この不始末で引き下がるべきは常陸女ということになるのだろう。 *「心の鬼」は<良心の呵責>という言い方らしいが、此処での守夫人の判断基準は自身の実感であって、理屈を摘めたものではないが、信ずるに足るという事では、最も確かなものかも知れない。

「かくてさぶらひたまはば(こうして御側近くにいなされば)、年ごろの願ひの満つ心地して(長年の願いが適う思いで)、人の漏り聞きはべらむもめやすく(あなた様の縁者と世間に知れるのも

光栄で)、おもだたしきことになむ思ひたまふるを(誇らしいことと存じられますが)、*さすがにつつましきことになむはべりける(やはり遠慮すべきでございました)。*深き山の本意は(出家の発心は)、*みさをになむはべるべきを(固く守るべきものでございましたものを)」 *「さすがにつつましきことになむはべりける」は<今回の滞在が間違いだった>という言い方だから<只今を以て失礼致します>を言外に示しているのだろう。 *「ふかきやまのほい」は<山籠もりして修行する本来の考え=出家の本懐>。 *「みさを」は<貞節、固く守るべき信念>ということらしい。 尊い不変の真心なら「御真緒」だろうか。

とて、うち泣くもいとほしくて(と言って守夫人が泣き出すのも実に気の毒で)、

「ここには、何事かうしろめたくおぼえたまふべき(此処での滞在に何のご心配なのでしょう)。とてもかくても(何か私が姫君を)、疎々しく思ひ放ちきこえばこそあらめ(邪険に見放し申したならともかく)。*けしからずだちてよからぬ人の(悪戯好きの不屈き者が)、時々ものしたまふめれど(時々いらっしゃるようですが)、その心を皆人見*知りためれば(そういう宮のクセは女房たちは皆知っていることなので)、心づかひして(注意して)、便なうはもてなしきこえじと思ふを(不都合には計らい申さないとと思うものを)、*いかに推し量りたまふにか(何があったと御考えなのですか)」 *「けしからずだちてよからぬ人」は「時々ものしたまふめれど」と敬語遣いされるので句宮のことだ。 *「知りためれば」の「ためる」は「たんめり」の撥音無表記とのこと。「たんめり」は「たるめり」で<～しているようだ>だが、この「めり」は言い難い事柄を<大体そういうこと>と言う時の曖昧表現で推量ではない。 *「いかに推し量りたまふにか」は<未遂だったから大丈夫>という慰めに聞こえるが、今後の事を思えば、とても姫の滞在は続けられるものではないだろう。

とのたまふ(と御方は仰います)。

「さらに、御心をば隔てありても思ひきこえさせはべらず(決してあなた様のお気持ちを不親切には思い申しておりません)。*かたはらいたう*許しなかりし筋は(面目なく故宮に認知いただけなかったことについては)、何にかかけても聞こえさせはべらむ(どうして些かもあなた様に訴え申せましょうか)。*その方ならで(その事を別にしても)、思ほし放つまじき綱もはべるをなむ(あなたと私は従姉妹の間柄なので、お見捨てなさらぬ縁もあろうかと)、とらへ所に頼みきこえさする(頼みの綱に思っています)」 *「かたはらいたし」は<傍目に極まりが悪い>で、自分のことであれば<面目ない、恥ずかしい>くらいの言い方ようだ。 *「許しなかりし筋」は注に<故八宮から浮舟が実子として認知してもらえなかったことをさす。>とある。会話者同士で話題が絞られているからこそ通じる言い方で、一般的な言い方だったら何のことか分からないだろう。 *「その方ならで、思ほし放つまじき綱」は注に<『完訳』は「八の宮につながる縁以外にも、無関係ではない絆もあるとする。自分が中の君の母の姪にあたることをいう」と注す。>とある。守夫人は御方の母君の従姉妹ではなくて姪だったか。夫人から見れば御方の母は叔母だったわけだ。ということは、御方と守夫人が従姉妹か。そうか、意外に近い。確かに、宿木巻七章四段の弁尼が守夫人を語る話に「母君は、故北の方の御姪なり。弁も離れぬ仲らひにはべるべきを」とあって、また、椎本巻三章六段に「この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり(この弁の君は、故藤原大納言の御乳母子で、父親は宇治姫君たちの母君の叔父で左中弁で亡くなった人の子なのでした)」とあり、御方の母君と従姉妹なのは弁尼だった。だから、守夫人と弁尼も遠縁の間柄だ。弁尼は、薫殿の実の父親である故藤原大納言の情人だったわけで、そう思えば、ずいぶん近い血縁の女たちがずいぶん違う立場の人生を送っているものと、改めて知らされる。

など(などと守夫人は)、おろかならず聞こえて(縁ある仲を訴え申して)、

「*明日明後日、かたき物忌にはべるを(明日明後日は姫の重い謹慎日に当たりますので)、*おほぞうならぬ所にて過ぐして(特別嚴重な所に籠もり過ぐして)、またも参らせはべらむ(改めて伺わせます)」 *「あすあさって」は注に<以下「参らせはべらむ」まで、浮舟母の詞。『集成』は「物忌は普通二日間のことが多い」。『完訳』は「物忌にかこつけて引き取る」と注す。>とある。 *「おほぞう」は<[名・形動ナリ] 特に取り立てていうほどではないこと。また、そのさま。とおりにっぺん。いいかげん。>と大辞泉にある。ただ、守夫人が御方に面と向かって二条院を<大した事のない通り一遍の所>と言ったとは思えないので、この「おほぞう」は<普通の構造の部屋>という意味かと思われるが、むしろ「おほぞうならぬ」で<嚴重に外と遮断して締め切った、特別仕立ての>という成句扱いと見た方が良さそうだ。

と聞こえて(と申し上げて)、いざなふ(守夫人は姫を連れ出します)。「いとほしく本意なきわざかな(残念で不首尾なことになった)」と思せど(と御方はお思いになったが)、えとどめたまはず(とても止め立てはなされません)。あさましようかたはなることに驚き騒ぎたれば(思い掛けない不祥事に驚き慌てていたので)、をさをさものも聞こえて出でぬ(守夫人一行は長話もせずに二条院を去りました)。

[第二段 浮舟の母、娘を三条の隠れ家に移す]

*かやうの方違へ所と思ひて(このように姫に何か不都合が生じた場合の避難先として)、小さき家まうけたりけり(守夫人は小さな家を用意していました)。三条わたりに(三条辺りで)、さればみたるが(洒落た造りだが)、まだ造りさしたる所なれば(まだ造り掛けなので)、はかばかしきしつらひもせでなむありける(ちゃんとした部屋飾りはしてありませんでした)。 *「かやう」は<このような場合の>と言っても、今回の事件を想定したのではなく、事情のある姫なので、何か不都合があつて常陸守邸に居辛くなるような場合に備えた、ということだろう。

「あはれ(ああ本当に)、この御身一つを(あなた一人を)、よろづにもて悩みきこゆるかな(持て余し申します)。心にかなはぬ世には(納得できない人生は)、あり経まじきものにこそありけれ(生きる価値が無いが)、みづからばかりは(私自身だけのことなら)、ただひたぶるに品々しからず人げなう(もうまるで身分も大した事が無く人間らしくもない)、ただ*さる方にはひ籠もりて過ぐしつべし(常陸守のような地方官暮らしに引き籠もってでも過ぐして行けるのです)。*このゆかりは、心憂しと思ひきこえしあたりを(あの二条院の御方は、あなたを見捨てた宮家の方で、恨み申してきた家筋ではあるものの)、睦びきこゆるに(やはり王家筋の縁と頼って、恥を忍んでお近付き申したというのに)、便なきことも出で来なば(受領の家格すら無視された召人扱いなどという、心外な事態となれば)、いと人笑へなるべし(身の程知らずが墓穴を掘ったと、よけい笑い者になってしまう)。あぢきなし(情け無いことです)。 *「さる方に」は注に<受領の後妻という境遇をさす。>とある。 *「このゆかりは心憂し」は注に<『集成』は「このご親戚は(中の君方は)ひどいなさりようとお恨み申した所なのに。子と認めてもらえなかったことをいう」と注す。>とある。とても分かり難い言い方で、注釈で分かった心算になって読み返しても、それにしても何でこんな言い方をするのかと思うほどの曖昧表現で、それだけ言い難い本気の悪口なのかと思って置く。「あたりを」の「を」は逆接助詞らしい。

*ことやうなりとも(見慣れぬ粗末な家でも)、ここを人にも知らせず、忍びておはせよ(此処を誰にも知らせずに、隠れていなさい)。おのづからともかくも仕うまつりてむ(そのうちに何とか致します)」 *「ことやうなりとも」は注にく普通でないさま。粗末な家の造りであるが。>とある。

と言ひおきて(と守夫人は姫に言い置いて)、みづからは帰るなむとす(自分は常陸守邸に帰ろうとします)。君は、うち泣きて(姫君は泣き出して)、「世にあらむこと所狭げなる身(聞いたことも無い肩身の狭さです)」と、思ひ屈したまへるさま(とあって気落ちしている姿は)、いとあはれなり(とても不憫なのでした)。親はた、ましてあたらしく惜しければ(母親はまた、まして残念で諦めきれないので)、つつがなく思ふごと見なさむと思ひ(首尾よく望ましい結婚をさせてやりたいと思ひ)、さるかたはらいたきことにつけて(昨夜の三の宮を近付け申した不始末に付いて)、人にもあはあはしく思はれむが(御方の女房たちに軽々しい女と思われるのが)、やすからぬなりけり(我慢できないのでした)。

*心地なくなどはあらぬ人の(守夫人は思慮が足りないわけではないものの)、なま腹立ちやすく(直情性で直ぐ腹を立てやすく)、思ひのままにぞすこしありける(わがままでは少しありました)。かの家にも隠るへては据ゑたりぬべけれど(姫を常陸守邸にも隠し置くことは出来たが)、しか隠るへたらむをいとほしと思ひて(そのように姫が隠れ暮らすのを不憫に思ひ)、かく扱ふに(この三条邸に連れて来たが)、年ごろかたはら去らず(長年側を離れず)、明け暮れ見ならひて(毎日一緒にいたので)、かたみに心細くわりなしと思へり(こうして暫く別れ住むようになる事を、互いに心細く不服に思いました)。 *「こちなし」は<心構えがない。思慮分別がない。>と古語辞典にある。現代語には無い語用だ。

「ここは、またかくあばれて(ここはまた、このような荒ばら屋で)、危ふげなる所なめり(無用心なので)。さる心したまへ(しっかり戸締りして下さい)。曹司曹司にある物ども(小部屋にある調度道具を)、召し出でて使ひたまへ(乳母に用意させて使いなさい)。宿直人のことなど言ひおきてはべるも(殿居の侍に注意事項を言い置いてあるものの)、いとうしろめたけれど(あなたを此処に残し置くのは、とても不安ですが)、かしこに腹立ち恨みらるるが(常陸守に留守を怒られ責められるのが)、いと苦しければ(とても厳しいので)」

と、うち泣きて帰る(と守夫人は泣き泣き帰ります)。

[第三段 母、左近少将と和歌を贈答す]

少将の扱ひを(婿の左近少将の待遇を)、守は(夫の前常陸守は)、またなきものに思ひ急ぎて(この上なく大事に思ひ準備して)、「*もろ心に(一緒になって)、さま悪しく(無様なことに)、當まず(手伝わない)」と怨ずるなりけり(と夫人の事を非難するのです)。(しかし夫人は)「いと心憂く(実に心外で)、この人により(この人の所為で)、かかる紛れどももあるぞかし(こういう面倒なことになったのだ)」と、またなく思ふ方のことのかかれば(と最愛の娘に災いが及んでいるので)、つらく心憂くて(悲しく嫌で)、をさをさ見入れず(とても応対に身が入りません)。 *「もろごころにさまあしくいとなまず」は注にく「さま悪しく」挿入句。「もろ心に」は「當まず」にかかる。>とある。発言文ならではの勢いある言い方、なのだろうが、校訂無しには私には歯が立たない。

かの宮の御前にて(二条院の三の宮の御前で)、いと人げなく見えしに(とても貧相に見えたので)、多く思ひ落としてければ(夫人は少将を、多分に軽蔑していたので)、「私ものに思ひかしづかましを(大事な婿と思って御世話申したい)」など、思ひしことはやみにたり(などと、かつて姉姫の婿候補だった時に、思っていた気持は無くなっていました)。(それでも、妹姫の婿には違いないので)「*ここにては、いかが見ゆらむ(此処ではどう見えるのだろうか)。まだうちとけたるさま見ぬに(まだ寛いだ姿は見えていないから)」と思ひて(とあって)、のどかにみたまへる昼つ方(少将がのんびりしていらっしゃる昼下がりに)、*こなたに渡りて(西の対の妹姫夫婦の居室に出向いて)、ものより覗く(物陰から様子を窺います)。*「ここにては」は注に<以下「見ぬに」まで、浮舟母の思い。「ここ」は常陸介邸に通って来る少将の様子を想像する。>とある。少将は妹姫の婿なのだから、守夫人にとって娘婿である事に変わりはない。*「こなた」は、かつて姉君の部屋だった「西の方」(二章二段)で、その「西の方」が<寝殿の西部屋>なのか<西の対>なのか私には判然としませんが、其処を妹夫婦の居室に譲って姉姫は「御方は北面に居たり」(二章二段)とも語られていたので、どうも<西の対>ではありそうだ。

白き綾のなつかしげなるに(白い綾織の着慣れたような内着に)、*今様色の擣目などもきよらなるを着て(橙色の打目模様も美しい上着を着て)、端の方に前裁見るとて居たるは(縁側近くで前庭を見ている少将は)、「いづこかは劣る(何処と言って劣る事のない)。いときよげなめるは(とても整った姿のようだ)」と見ゆ(と夫人には見えます)。*娘(妹姫の常陸守との間の娘は)、まだ片なりに(まだ妻としては半人前で)、何心もなきさまにて添ひ臥したり(あまり気も利かなそうに添ひ臥してました)。*宮の上の並びておはせし御さまどもの思ひ出づれば(二条院で三の宮と御方が並んでいらっしゃった御姿が思い出されて)、「口惜しのさまどもや(平凡な夫婦だ)」と見ゆ(と夫人は思います)。*「いまやういろ」は注に<『新大系』は「平安中期に流行した紅花染めの薄色」と注す。>とある。そう言われてもどんな色なのかさっぱり分からないが、紅花染めは赤系統で薄色と言っても桜の花びらや紅梅あたりの色合いだと、私には男物の印象には遠いが、絹糸の場合は紅花の黄色素も染め付くらしく、その薄色だと明るい肌色に近い感じで楽な普段着になりそうな気がする。これが直衣(なほし)なのか桂(うちき)なのかも分からないが、一応上着として置く。*「むすめ」は妹姫で、21歳くらいかと思われる姉姫に比べればだいぶ年下だが16歳とあったので、決して幼い童女などではない。*「宮の上」は<二条院の御方>だが、この一語で三の宮と御方の二人を指し示すらしい。注には<「宮の上」で一語。中君が匂宮と寄り添っていた様子と比較。>とある。

前なる御達にもものなど言ひ戯れて(側に居る女房たちに冗談を言って)、うちとけたるは(寛いでいる少将は)、いと見しやうに(以前とても印象深く見たように)、匂ひなく人悪ろげにて見えぬを(見栄えのない貧相には見えないのを)、「かの宮なりしは(あの二条院にいたのは)、異少将なりけり(別の少将だったようだ)」と思ふ折しも(と夫人が思ったその時に)、言ふことよ(当の少将がこう言い出します)。

「*兵部卿宮の萩の(兵部卿宮邸の萩が)、なほことにおもしろくもあるかな(やはり特に美しかったな)。いかで、さる種ありけむ(どのようにああい種が出来たのだろうか)。同じ枝さしなどのいと艶なるこそ(此処の萩と同じような育ち具合だが実に良い風情だった)。一日参りて(先日伺った時は)、出でたまふほどなりしかば(お出掛け間際だったので)、え折らずなりにき(枝を折り取ってくる事が出来なかった)。『*ことだに惜しき(今を盛りの、女が居た)』と、宮のうち誦じたまへりしを(と三の宮がその時に古歌を朗詠なさっていたのを)、若き人たちに見せたらま

しかば(若い女房たちに見せたいほどの優美さだった)」 *「へいぶきやうのみや」は二条院のことで<兵部卿宮邸>という言い方のようだが、この時点ではこれが一般的な言い方だろうか。 *「ことだに惜しき」は注に<『源氏積』は「移ろはむことだに惜しき秋萩に折れぬばかりもおける露かな」(拾遺集秋、一八三、伊勢)を指摘。>とある。色褪せて行くことさえ惜しい美しい秋の萩に枝が折れてしまうほど多く付いた朝露だ、という風情詠みのままで、いかにも女盛りの色っぽさを感じさせる伊勢の歌、といったところだろうか。特に是を朗詠する匂宮の意図は<今を盛りの美味そうな女を見つけた>と好色丸出した。その女こそが正に姉姫なのだろう。あの事件は、ほんの数日前のことだ。

とて、我も歌詠みみたり(と言って自分でも萩にちなんだ歌を詠んでいます)。

「いでや(いやいや)。心ばせのほどを思へば(少将の実利本意の性格からして)、人ともおぼえず(風情が分かる人とは思えず)、*出で消えはいとこよなかりけるに(三の宮の御前ででの見栄えはとんでもなく悪かったというのに)。何ごとと言ひたるぞ(どんな歌詠みをするのか)」 *「いでぎえ」は<差し出でて栄えない事。出来栄えの悪いこと。また、そのもの。>と古語辞典にある。注には<『集成』は「宮のお前でのみすぼらしさは、もう言いようもなかったのに」と訳す。「出で消え」は人前に出て見劣りがすること。>とある。

とつぶやかるれど(と夫人は思わず眩かすには居られないが)、いと心地なげなるさまは(少将はまったく無風流の様子には)、さすがにしたらねば(さすがにしていないので)、いかが言ふとて(どんな歌詠みをするのかと)、試みに(試しに)、

「しめ結ひし小萩が上も迷はぬに、いかなる露に映る下葉ぞ」(和歌 50-03)

「殿方は上辺と違う下半身」(意識 50-03)

*注に<浮舟母から少将への贈歌。「小萩」を浮舟、「露」を実の娘、「下葉」を少将に喩え、寝返った少将をなじる。>とある。「しめ」は「占め」で<占有地、占用地>を示し、またそれを示すための「しめなは・標縄・注連縄」のことでもある。「しめ結ひし」は注連縄を張るようにして大事に守り育てた、という言い方であり、また注連縄の神聖さに王家血筋の尊さを込めてもいるのだろう。「こはぎがうへ」は景色として見える小萩の上葉という風情めかした言い方で、「上」は<年上=姉>であり<身の上=事情>でもあるから<姉姫の事情>を話題にしている、それが「まよはぬに」とは<変わらないのに→一方的な其方の都合で>と少将を責めている。「露に映る」は<妹に移る>ということのようだが、「露に」には<不意に、俄かに>の語感もあるだろうし、色言葉としては「露に映る」で<射精して果てる>にも聞こえる。「したば」は「小萩が上」との対句語であり、視かねば見えない根元だが、当然に<下心、内心>を意味する。

とあるに(と問い掛けの歌を女房取次にしてみると)、*惜しくおぼえて(少将は夫人の誤解が悔しく思えて)、 *「をし」は<残念で悔しい>だが、何が惜しいのかと言えば、自分の心変わりは姉姫が連れ子との事情を知らなかった、知らされていなかったことによる誤認があったため、もともと自分は常陸守家の家格を見込んで姫との結婚を申し込んでおり、常陸守の実の姫をとという事で、相手を修正したに過ぎず、母君に自分が姉姫を嫌っているかの悪意を疑われるのは不本意で、そのまま誤解されていては<残念だ>ということであり、であれば、この際に申し開きをしておきたい、ということなのだろう。いや、その率直な合理性が如何にも姉姫に不遜なのだが、少将はその点に付いては一向に無頓着だ。

「宮城野の小萩がもとと知らませば、露も心を分かずぞあらまし (和歌 50-04)

「尊い上と知ってたら、何も下など取りません (意識 50-04)

*注に<少将の返歌。「小萩」「露」の語句を受けて、「宮城野の小萩」は、皇族の血を引く浮舟、「露」は自分自身を喩えて、「心を分かずぞあらまし」と返す。「ませば--まし」反実仮想の構文。>とある。「みやぎの」は大辞泉に<仙台市の区名。市の東部を占める。平成元年(1989)成立。古くは野が広がり、萩(はぎ)の名所として知られた。[歌枕]>とある。「小萩」を言う枕詞という風流な趣向らしい。また、「宮城野の小萩がもと」という言い回しは、桐壺巻二章二段の桐壺帝の歌に「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ(和歌 1-2)ともあって、「みやぎの」が<宮城野=宮中の庭>なのは自明だが、「宮城野の小萩」は確かに王家血筋の子をいう言い方ではありそうだ。少将は夫人の「しめ結びし小萩が上」という言い方に、姉姫の王家血筋を主張している、と理解していたわけだ。ま、私でも分かるのだから、当時の貴族にとっては全く常識の言い回しなんだろうが。そしてまた、持ち前の実直さ、率直さで、「宮城野の小萩がもとと知らませば(姉姫を王家血筋と知っていれば)」「露も心を分かずぞあらまし(露ほども妹君に気を向けることは無かった)」と取り繕った心算のようだが、是は是で妹姫に対する侮辱になっている、というお粗末。尤も、「露も心を」には<少しも気持を>の他に<情実を交わしたから>という艶な語感もあり、夫婦の契りを交わした妻を粗略に言うのは親しさの表現とも取れるので、強ち侮辱ではなく謙遜かもしれない。とすれば、姉姫が二条院の御方の義妹で二条院に匿われている、とはさすがに周囲事情から聞き知ったのだろうが、左近少将の腹積もりとしては、自分の経済基盤はこの受領家に頼るのが得策で、姉君が兵部卿宮の御方と縁があるなら、逃した惜しさよりは、姉君を利用でき得る手づるが増えたくらいに計算を立てていたのではないか。力の無い王家を養えるほどの財力が自分に無いくらいの自覚は少将にもあっただろう。

いかでみづから聞こえさせあきらめむ(是非直接ご説明申し上げたい)」

と言ひたり(と返歌して来ました)。

[第四段 母、薫のことを思う]

「*故宮の御こと聞きたるなめり(少将は姉姫が故人宮の子だという事情を聞き知ったらしいようだ)」と思ふに(と夫人は少将の返歌を読んで思うにつけても)、「いとどいかで人と等しく(ますます姉姫をどうにか王家筋に近く縁付けたい)」とのみ思ひ扱はる(とばかり思い回らされます)。
*「故宮の御こと聞きたるなめり」は少将の返歌に対しての夫人の印象だろうに、この文から段替えとする校訂は如何なものか。それに、結びの「思ひ扱はる」の「あつかふ」の「ふ」は、その場だけの対応というよりは一定の持続性・継続性が示されている語感で、下文の「あいなう」とに間があっても良さそうだ。

*あいなう(どうしても守夫人には)、大将殿の御さま容貌ぞ(薫大将殿の御姿形が)、恋しう面影に見ゆる(望ましい婿殿の面影に思えて来ます)。同じうめでたしと見たてまつりしかど(同じように高貴な方と拝し申し上げるものの)、*宮は思ひ離れたまひて(三の宮は従姉妹である二条院の御方の夫宮であるという面倒な事情からも、考慮対象から外れなさって)、心もとまらず(夫人の眼中にはありません)。あなづりて押し入りたまへりけるを(姉君を女房と軽視して謹慎部屋に押し入りなされたことを)、思ふもねたし(思うにも心外です)。
*「あいなし」は上文の「思ひ扱はる」を受けて<すると、どうしても>という言い方に見えて、此処から段替えはし難いのかも。だったら、無理に段替えしなくても良いのではないか。ただ、話題が少将から大将にはっきりと代わっているし、大将は脇役

の少将とは違って主役なのだから、此処で段替える説得力があると言えばあるのかも。 *「宮は思ひ離れたまひて」は、三の宮に事情があるような言い方だ。押し入りの件は下に語られるので、それ以外に基本的な問題点として考えられるのは、やはり三の宮は御方の夫宮であり、御方は夫人の従姉妹に当たる、という混み入った関係性が面倒で嫌気されるのかと思う。夫人は宮の貴人ぶりには圧倒されていたのだから。

「*この君は(そうした三の宮に引き換え、此方の大将殿は)、さすがに尋ね思す心ばへのありながら(同じように姉君を得たいという御意向はありながら)、うちつけにも言ひかけたまはず(三の宮のように軽々しくは言い寄りなさらず)、つれなし顔なるしも*こそいたけれ(澄まし顔なものも改めて至って立派なもの)、*よろづにつけて思ひ出でらるれば(少将の無礼や三の宮の御無体などに比して思い出されるので)、若き人は(若い姫君は)、まして(私以上に)、かくや思ひはてきこえたまふらむ(きっとそう考え至り申しなさるだろう)。*わがものにせむと(婿に迎えようと)、かく憎き人を思ひけむこそ(斯様な憎い少将を思っていたのは)、見苦しきことなべかりけれ(恥ずべきことだった)」 *「この君」は薫大将のことらしい。「この」は三の宮に対する比較対象を示す言い方だろうから、この文は<三の宮に比して>を補語すべきなのだろう。 *「こそいたけれ」は「しも」の強調に重ねた強調表現だから<特に今回のことで改めて再認識した>という事を示す言い方なのだろう。この「こそいたけれ」が「よろづにつけて思ひ出でらる」の形容修辭となる構文と取らないと文意が掴めないで、左様に解釈する。とすると、「今回のことで改めて」とは、三の宮が「あなづりて押し入りたまへりける」ことと比較して、という文脈になるのだろう。 *「よろづ」は<万事>だが、下に少将との比較までが語られるので、此処の「よろづ」は<薫大将と三の宮と左近少将>の比較考証らしい。 *「わがものにせむと」は注に<少将を浮舟の婿にしようと、かつては考えたことがある。>とある。此処の数行は非常に分かり難い言い回しだ。

など(などと守夫人は)、ただ心にかかりて(ずっと姫君が心配で)、眺めのみせられて(沈んだ気分)、とてやかくてやと、よろづによからむあらまし事を思ひ続けるに(彼是と何とか上手く行く道筋を考えてみるが)、いと難し(大将殿との縁談は、実に難しい)。

「やむごとなき御身のほど(大将殿はその高貴な御身分と言ひ)、御もてなし(御立ち居振る舞いと言ひ)、見たてまつりたまへらむ人は(娶りなさった相手は)、今すこしなめならず(内親王という別格の貴人であつてみれば)、いかばかりにてかは心をとどめたまはむ(我が家の姫君などに、どれほどの待遇をして頂けるものだろうか)。世の人のありさまを見聞くに(世情を見聞きしても)、劣りまさり(人となりの優劣も)、いやしうあてなる(尊卑も)、*品に従ひて(血統次第で)、容貌も心もあるべきものなりけり(容姿や性格は決まってしまうものようだ)。 *「しな」は、上文で女二の宮を引き、下文で姫君が父君の故八宮の血を引くことを言う繋がりを見ると、王家血筋の尊さを念頭に言っている語のようなので、臣下で言う<身分・地位>ということではなくて、いわゆる人品の尊卑を言う<家系・血統>のことのようだ。

わが子どもを見るに(常陸守家の我が子供たちを見ても)、この君に似るべきやはある(この姉姫君に及ぶ者は居ない)。少将を(夫の前常陸守は左近少将を)、この家のうちにまたなき者に思へども(当家の最上位者と思っているが)、宮に見比べたてまつりしは(もう一人の姫君に言い寄りなさらした三の宮とお見比べ申せば)、いとも口惜しかりしに推し量らる(少将に姉姫を添わせていたら、どんなに残念だったかと想像される)。当帝の御かしづき女を得たてまつりたまへらむ人の御目移しには(今上帝の御愛息女を得申しなさった人の第二夫人探しには)、いともいとも恥

づかしく(我が姫君ではとてもとても恐れ多く)、つつましかるべきものかな(気が引けてしまうものだ)」

と思ふに(と思うと)、すずろに心地もあくがれにけり(守夫人は思わず王家生活が懐かしく気もそぞろになるのです)。

[第五段 浮舟の三条のわび住まい]

*旅の宿りは(姉姫君の三条邸の仮住まいは)、つれづれにて(手持ち無沙汰で)、庭の草も*いぶせき心地するに(庭の草も寂しげで)、いやしき*東声したる者どもばかりのみ出で入り(荒々しい東国訛りの従者ばかりが出入りして)、慰めに見るべき前栽の花もなし(慰めに出来る前庭の花も無い)。 *「旅の宿りは」は注に<浮舟の三条の隠れ家の生活。>とある。「たび」は<一時的に本拠を離れて他所に居ること>で、何も<行楽>をいう言葉ではない。此处では、他所と言っても自家ではあり、一時的な<仮住まい>という事情だ。 *「いぶせし」は<晴れ晴れしない>。「いぶせき心地」は<うっとうしい気分>でもあるだろうが、「うっとうしい」という語感がこの姉姫には似あわず、どこか気弱なく寂しい気分>くらいに見て置く。 *「あづまごゑ」は東国出身の従者の声で、その者たちが特に粗野な性格だったり、一般の従者に比して一段と身分が低いということではなく、京都人から見て開拓地の逞しい風土自体が「いやし」いのだろう。しかし、そういう人たちが食料や日用品を運び入れてくれるから姫の生活も成り立ってはいけるのだろうに。

うちあばれて(殺風景で)、晴れ晴れしからで明かし暮らすに(塞いだ気分の日々を送る内に)、宮の上の御ありさま思ひ出づるに(二条院の御方の御暮らしぶりを思い出しては)、若い心地に恋しかりけり(その華やかさが子供心のまま素直に恋しくなりました)。あやにくだちたまへりし人の御けはひも(しかし、不意に押し入りなされた三の宮のことも)、さすがに思ひ出でられて(やはり思い出されて)、

「*何事にかありけむ(どういうことだったのだろう)。いと多くあはれげにのたまひしかな(いろいろと親切そうに仰っていたようだが)」 *「何事にかありけむ」は、姫が匂宮の言っていたことが理解出来ていなかったという事を示す。が、匂宮が姫を新人女房と思って素性をしきりに聞いていたことは、四章三段に「誰れと聞かざらむほどは許さじ」と宮の発言の一例が示されていて、それに姫が答えなかったのは、質問の意味が分からないのではなく、恐ろしくて声が出なかったのだろうが、それ以外に言い寄る男が親切めかして言いそうで、未通女や世間知らずが分からないことという、例えば<悪いようにはしない>とか<御方や他の女房たちのことは気にしなくても良い>とか<何か欲しい物はないか>とか、だろうか。召人の生活はおろか、女房仕え自体も、まして奥方や御部屋様の実際の暮らしぶりなども、姫にはまだ分かっていない。勿論、私にもそんなことは分からないが、自分が一定の責任と権限を持って生活するという事自体を、姫は恐らく未だ経験していない。

名残をかしかりし御移り香も(良い香りがした宮の御残り香も)、まだ残りたる心地して(まだ記憶に残っている感じで)、恐ろしかりしも思ひ出でらる(その時の恐ろしかった記憶も思い出されます)。

「*母君、たつやと(母君は私が元気でいるかと)、いとあはれなる文を書きておこせたまふ(とても案じた手紙を書いて遣しなされる)。おろかならず心苦しう思ひ扱ひたまふめるに(とても深く御心配頂いているようだが)、*かひなうもて*扱はれたてまつること(今後の見通しが立たぬまま

に御世話頂いてしまっていることだ)」とうち泣かれて(と姫はつい泣けてしまって)、*「母君たつやと」は注にく以下「たてまつること」まで、浮舟の心中。『集成』は「たつやと」は、諸本異同はないが、解しがたい。『玉の小櫛』は、「いかにやと」の誤写とするが首肯しがたい。旧説は「母君だつやと」と読んで、母君らしくか、と解する」と注す。>とある。本文が不確かなのでは考えようもないし、また専門家が「諸本異同はない」というのではお手上げだが、ウェブで公開されている写本画像を一応は当たって置く。写本は原典なので、それを当てる事が無駄骨や徒労などである筈はないが、私にとって写本参照は不慣れな作業で、時間と手間を非常に多く弄するにも関わらず、基本知識や訓練が無いので、結局は当て図法に過ぎないというリスクなもので、今のところ私の主たる興味対象足りえないので、この作業が省けることに何の支障も無いが、情緒を味わうという点では、偶に眺めるのも悪くない。と、重文保坂本「宇治乃六あづまや」(78/99)では「はゝきみたつやと」とあるようで、京都大学本(v. 48, p. 142)では「はゝきみ多津やと」とあるように見える。だから、本文を「母君たつやと」とあるものとして、「たつや」を「いとあはれなる文を書きておこせたまふ」ことの説明になるような意味に考えてみる。また、守夫人についての地文語りでは敬語遣いが無いので、この「おこせたまふ」の敬語遣いから、当文を姫の内心文と見て、この「たつ」に敬語が無いのは姫に対して守夫人が働き掛ける他動詞だとすれば、「たつや」は姫自身の状態が「たつ」ているのではないかと母君が案じている、という意味になりそうだ。となると、この「たつ」は<身が立つ→達者でいる→元気である>くらいに大雑把に取るのが無難に見える。ところで、注とは別に、「たつや」の語用の参照歌の出典として「花散ると厭ひしものを夏衣たつや遅きと風を待つかな」(拾遺集夏-八二 盛明親王)が指摘されていて、この「たつ」は衣の縁語の「裁つ」と月日の「経つ」を掛けて、春の終わりを惜しんでいたら暑さで早く衣替えがしたくなる、という季節の移ろいを風流に詠んでいるので、是に習えば、此処の「たつや」も「経つや」で<如何お過ごししか>という言い方になりそうだ。となると、むしろ、この参照歌引用が本命で、この「たつや」は<裁つや=衣替えは済んだか>という季節の挨拶になっていて、実は10月の話になっているのではないかと、とも勘繰ってみたが、すぐ下に「秋深くなりゆくころ」(六章一段)と語られていて、話はまだ晩秋9月のことらしい。ただ、旧暦9月は今の10月くらいなので、実際には冬服に替えていても変ではないような気もする。*「かひなし」は<成果が無い>で、此処では<心配が解消されない=解決策が無い=何の見通しも立たない>ということと取って置く。*「扱はれたてまつる」は、「あつかはれ」が「あつかふ(手厚くする、世話する)」の未然形「あつかは」に受身の「る」が付いた姫が主語の「あつかはる(処遇される)」という言い方の連用形で、「たてまつる」は母君の謙譲姿勢を受け手側の姫の立場で表現する丁寧語の<して頂く>だから、全体で<御世話して頂く>という言い方なのだろう。

「いかにつれづれに見ならはぬ心地したまふらむ(どんなに退屈な不慣れな生活の気分であらうと申しますことか)。しばし忍び過ぎしたまへ(もう少しご辛抱下さい)」

とある返り事に(とある母君の手紙の返事に)、

「つれづれは何か(退屈ということはなく)。心やすくてなむ(のんびり暮らしてはいます)。

ひたぶるにうれしからまし、世の中にあらぬ所と思はましかば」(和歌 50-05)

不自由が いっそ嬉しい かくれんぼ」(意識 50-05)

*注にく「まし--ましかば」反語仮想の倒置法表現。『河海抄』は「世の中にあらぬ所もえてしがな年ふりにたるかたち隠さむ」(拾遺集雑上、五〇六、読人しらず)。『花鳥余情』は「恋ひわびてへじとぞ思ふ世の中にあらぬ所やいづこなるらむ」(曾丹集)を指摘。>とある。「世の中にあらぬ所」は<世の中の柵を離れた暮らし>とかく誰

にも会わない隠遁生活>みたいなことだろうか。この語用は決して子供っぽくはなさそうだから、「ひたぶるにうれしからまし」の強がりか親を気遣った可愛らしさなのだろう。

と、幼げに言ひたるを見るままに(と姫が幼いながら気遣って詠んで来たのを見た途端に)、ほろほろとうち泣きて(母君はほろほろと泣き出して)、「かう惑はし*はふるるやうにもてなすこと(このように姫を不安にさせ彷徨わせてしまっているとは)」と、いみじければ(と非常に遺憾なので)、 *「はふる」は「放る」で<放浪する>と古語辞典にある。

「憂き世にはあらぬ所を求めても、君が盛りを見るよしもがな」(和歌 50-06)

「憂き世から 離れるほどの 御目出度さ」(意識 50-06)

*「世の中にあらぬ所」は<隠れ住む>という形態を言っているようだが、それを「憂き世にはあらぬ所」と言い換えると、厭世を避けるという意味は引きながらも、必ずしも<隠れ住む>とは言っていないことになりそう。が、この母君の歌詠みの方が、よっぽど大喜利物の言葉遊びで、姫の「世の中にあらぬ所」と三条邸を例えた詠みの方が工夫はあるように見える。が、このどちらかを語り手は「なほなほし(普通だ、当たり前だ)」と言っていて、今は工夫を楽しむ余裕は無いということらしい。

と(と母子は)、なほなほしきことどもを言ひ交はしてなむ(素直な文で手紙を交わして)、*心のべける(真情を言い合いました)。 *「こころのぶ」は特に<真情を言う>のだから、「なほなほし」は<素直だ>という意味なのだろう。